

栃木県鹿沼市におけるMIMの取組

I 鹿沼市における教育環境・状況

1 鹿沼市における基礎情報（平成26年5月1日現在、人口を除く）

- (1) 人口 99,374名
- (2) 学校数 市立小学校27校, 市立中学校10校
- (3) 児童・生徒数 小学校 5,229名, 中学校 2,718名
- (4) 通級指導教室および特別支援学級の設置状況

① 小学校

通級指導教室

言語障害	1校,	1教室,	12名
学習障害	1校,	1教室,	15名
情緒障害	1校,	1教室,	23名
自閉症・肢体不自由	1校,	1教室,	7名, 1名
自閉症・情緒障害	1校,	1教室,	1名, 15名
自閉症・学習障害・注意欠陥多動性障害	2校,	2教室,	9名, 21名, 6名
自閉症・注意欠陥多動性障害・肢体不自由	1校,	1教室,	9名, 4名, 1名
自閉症・情緒障害・学習障害・注意欠陥多動性障害	1校,	1教室,	1名, 9名, 7名, 5名,

特別支援学級

知的障害	16校,	21学級,	86名
肢体不自由	3校,	5学級,	5名
自閉症・情緒障害	19校,	24学級,	96名

② 中学校

通級指導教室

情緒障害	1校,	1教室,	6名
自閉症・注意欠陥多動性障害	2校,	2教室,	8名, 9名
自閉症・情緒障害・学習障害	1校,	1教室,	6名, 3名, 8名
自閉症・学習障害・注意欠陥多動性障害	1校,	1教室,	11名, 9名, 5名
自閉症・情緒障害・学習障害・注意欠陥多動性障害	1校,	1教室,	3名, 2名, 4名, 1名
自閉症・弱視・学習障害・注意欠陥多動性障害	1校,	1教室,	3名, 1名, 6名, 1名

特別支援学級 9校, 22学級

知的障害	9校,	12学級,	48名
自閉症・情緒障害	7校,	10学級,	41名

(5) 特別支援学校の設置状況

栃木県立の特別支援学校 1校

- ・ 県立富屋特別支援学校鹿沼分校(知的障害の小・中学部)

2 鹿沼市における発達障害関連の施策

(1) 文部科学省の委託事業

「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業」

実施期間：平成26年度～27年度

概要：鹿沼市立みなみ小学校を指定校として、発達障害の可能性のある児童に対する早期発見のための教育アセスメントの開発・実施や発達障害の可能性のある児童に対する早期支援の在り方について、全学級・全教科を対象とした学び合う関係づくりの育成に取り組んでいる。また、鹿沼市教育委員会では、鹿沼市内の小中学校に、指定校の研究実践やその成果の一般化を図るため、研修会を年に3回実施している。

(2) 県の委託事業：なし

(3) 市独自の事業：なし

3 鹿沼市における学力向上関連の施策

(1) 文部科学省の委託事業：なし

(2) 県の委託事業

「学力向上アドバイザー派遣事業」

実施期間：平成26年度～平成28年度

概要：とちぎっ子学習状況調査の効果的な活用や、学習指導における検証改善サイクルの確実な構築・運用を促進するため、学力向上アドバイザー（退職校長を県が再雇用）が派遣されている。本市では、小学校9校、中学校3校を派遣指定校とし、学力向上アドバイザーの助言により、「学力向上改善プラン」を作成し、学力向上に取り組んでいる。

(3) 市独自の事業

① 「指導者養成研修会」

実施期間：算数・数学科は平成25年度から。国語科は平成26年度から。

概要：算数・数学科においては年に5回、国語科においては年に3回実施している。目的としては、教師の授業力向上をめざし、B問題(活用)を中心とした指導法について研修している。内容としては、大学の教員による講話や師範授業、また、指導案を受講者が作成し研究授業や授業研究会を実施している。

② 「教科指導委員による指導訪問」

概要：指導主事の補佐として教科指導員（鹿沼市内小中学校の教員。各教科、他領域、人権教育、特別支援教育、情報教育、学級経営等の指導に秀でた教員を選抜し、委嘱）30名配置し、教員に対し教科等に関する研究会において指導助言をする。平成26年度は学校から延べ約40回の要請に対応している。

4 発達障害のある子ども等への支援のリソース

(1) 支援員や巡回相談等の人的支援

① 非常勤講師

概要：指導困難校を中心に59名の非常勤講師が、市内小中学校37校中、33校の通常学級や特別支援学級、通級指導教室で支援をしている。非常勤講師の勤務対応は、週5日、1日7時間の勤務で、発達障害等が考えられる児童生徒に対して支援をしている。なお、職務は「多人数学級(原則として30人を超える学級)における学習指導等の補助」「複式学級における学習指導等の補助」「指導困難な学級における学習指導等の補助」である。資格(要件)は、普通免許状を有するものである。

② スクールカウンセラーを小中全校に複数配置(一名が2, 3校を担当)

概要：スクールカウンセラーを市内16校の小中学校(小学校9校, 中学校7校)に配置している。

③ 巡回学校訪問

概要：鹿沼市教育相談専門員4名(臨床心理士3名, 特別支援教育士1名)が、学校の要請に応じて児童生徒の行動観察や学級担任へのコンサルテーションを行っている。その後、保護者の同意を得て、教育相談室での相談につなげて継続的に支援している。

④ 家庭訪問の実施

概要：鹿沼市教育相談専門員5名が、月3日以上欠席している児童と月7日以上欠席している生徒に対して、家庭訪問をして登校のサポートをしたり、家庭でのカウンセリングを行ったりしている。

(2) 教材等の提供といった物的支援

特記事項なし

(3) 公的な相談・指導機関

鹿沼市総合教育研究所では、12名の教育相談専門員が就学相談や発達相談、発達障害が疑われる児童・生徒について教育相談を行っている。臨床心理士5名, 特別支援教育士1名, 学校心理士補1名, 教育カウンセラー2名, その他5名(複数の資格所有者有り)。

(4) その他

① 別室登校支援

概要：市内小中学校に不登校対策担当教員(校務分掌に位置づけ)を1名指名して、登校しても教室に入ることができない児童生徒の対応や学級担任と連携して、校内の空き教室などを活用し学習支援をしている。各校の不登校対策担当教員は、校内の体制調整だけでなく、関係機関との連絡調整も担当している。

② 適応指導教室

概要：鹿沼市適応指導教室では、学校不適応になった児童生徒に対して、学校復帰や社会的自立をめざして指導している。市内に2教室設置している。12名の教育相談専門員のうち、適応指導教室のスタッフは、3

名＋学校籍(教員)1名である。3名の教育相談専門員の保有している資格は、臨床心理士1名、元教員(臨採)1名、その他1名(4月より教員)。

II 鹿沼市における MIM の取組

1 MIM に取り組むことになった経緯

(1) 小学校1年生の通常の学級での入門期の読み書き指導は、非常に重要であると考えられる。1年生の段階で語を解読できれば、適切な語彙の発達を促し、後の学年に向け、読みの流暢性や、より複雑な読解も可能となると考えられる。

その一方で、ひらがなの読み書きの習得の遅れや、特殊音節のルール理解に関するつまずきは、その後の読み書きの困難に繋がる可能性がある。また、1年生の終わりまでに、読みの基本的なスキルが十分に習得できない場合、すべての学習活動で、ネガティブに作用するだけでなく、学年・学級を超えた仲間との活動においても影響を及ぼす可能性も否定できない。

そのため、この時期の指導は、非常に大切であると考えられるが、学級では、多様な児童を一斉指導という形態で指導しなければならないため、多様性に応じた指導は十分であるとは言えず、ましてや児童生徒の認知特性に応じた学習の保障も難しいのが現状である。

また、全国学力・学習状況調査の結果を分析すると、本市では、平成19年度から小学校国語において国語A(知識)、国語B(活用)ともに全国平均正答率に対してやや劣っている状況にある。特に、「文が句点によって区切られることへの理解」や「複数の内容を含む文について、主語と述語との関係や接続語の役割を押さえながら分析的にとらえること」について課題がみられる。つまり、学力向上の観点からも小学校低学年から読みについての効果的な指導の必要性が出てきた。

更に、本市においては、社会情勢の変化や教育環境の変化、関連法改正等に伴い、長期的な視点に立ち新たな時代に対応していくための教育の展望と方向性を定めていくことを目的とし、新たな教育の指針として「鹿沼市教育ビジョン」(2012年～2021年)を策定した。その基本施策の1つ「新しい教育課題への対応」において、発達障害に対して、早い段階からその子にあった教育が行われるよう対応していくことが掲げられており、行政主導による発達障害に対する指導・支援の推進が期待されている。

そこで、これらの課題に対処するため、学習面のつまずきに対する体系的でかつ科学的根拠のある多層指導モデル MIM を活用した指導を通して、読みの効果的な早期指導・支援に取り組もうと考えた。

(2) 本市では、学校単位で MIM を実施したり、読み書き指導の一環で MIM を取り入れた授業を試験的に取り組んでいたりする教諭はいたが、自治体としての積極的な取組はなかった。その中で、平成24年度一般社団法人日本 LD 学会第21回大会において、鹿沼市立みなみ小学校教諭三澤雅子先生(現栃木県総合教育センター副主幹)が、「アセスメントから見えてきた通常の学級の入門期の読み書き指導における成果と課

題～ひらがな清音指導から MIM を活用した特殊音節・読みの流暢性を高める指導を通して～」について発表され、それを契機に、自治体として MIM の導入を検討した。

MIM を導入するに当たり予算面での折り合いが付かず、導入に踏み切れないでいたが、平成 26 年度文部科学省による「発達障害の可能性のある児童生徒に対する早期支援研究事業」を知り、平成 26 年度から 27 年度の 2 年間、この研究事業の中で、取り組むこととした。

平成 26 年度は、モデル校を 1 校指定し、MIM の実践研究に取り組む他、他の小中学校へはその研究内容を紹介していくとともに、市教育委員会主催の MIM に関する研修会を 3 回実施した。平成 27 年度は、全小学校で MIM の実施を考えている。

2 MIM に関する実施計画

- (1) 平成 26 年度 モデル校 1 校で先行実施
- (2) 平成 27 年度 市内 27 小学校全校で実施予定

3 MIM に関する事業における行政(教育委員会等)の具体的役割

- (1) 本市では、MIM を学力向上の一方策として位置付け取り組んでいる。そのため、MIM の活用法の習得を目標とした研修会を通して、教職員の専門性の向上を図る。
また、読みの能力を把握するためのアセスメント等による発達障害の可能性のある児童の早期発見、アセスメントに対応した 1st ステージ、2nd ステージ、3rd ステージ指導による早期支援を実施し、児童の認知特性に対応した学習の保障に努める。
- (2) 本市全小中学校 37 校に MIM を配置する。
- (3) MIM を学校全体で取り組んでいくためには、管理職の強いリーダーシップが欠かせないと考えている。そこで、管理職を対象とした MIM 推進のための校内指導研修会を実施する。
- (4) MIM の研修会を通して、モデル校の指導実践事例を他校に紹介するとともに、未実施校に実践に向けた啓発を行う。
- (5) モデル校に MIM 担当者を配置し、他校への要請に応じて指導・支援を行う。MIM 担当者とは、モデル校(鹿沼市立みなみ小学校)で、教員に対して校務分掌に MIM 担当として 1 名を位置づけている。モデル校での MIM の推進者であり、あわせて市教委主催の MIM の研修会において講師を担当したり、他校の要請に応じて MIM の指導・支援を行ったりする。現在、みなみ小学校で MIM 担当者を養成中である。
- (6) 学校訪問等で MIM の実施状況を確認し、必要に応じて指導・助言をする。
- (7) MIM-PM テストを定期的実施し、その結果を教育委員会が管理し、必要に応じて結果の分析やその指導法について指導・助言する。

4 MIM に関する研修

- (1) 平成 26 年度
 - ① MIM に関する先進地・先進校への視察研修(6/23～6/24)
 - ・市教育委員会指導主事 1 名が視察
 - ・飯塚市教育委員会合田賢治指導主事による教育委員会の取組の説明

- ・飯塚市立立岩小学校授業参観
- ・飯塚市立伊岐須小学校垂水陽子校長，石橋格教頭による「MIM の推進～管理職として取り組むこと～」の説明

② MIM に関する研修会：3 回

ア：「低学年における読み・書き指導～多層指導モデル MIM 教材の活用に視点を当てて～」(5 月 22 日実施)

- ・MIM を導入した授業の進め方
- ・アセスメントとしての MIM の活用

講師：栃木県総合教育センター 三澤雅子先生

対象者：校長，教頭，第 1 学年担任，第 2 学年担任，特別支援学級担任，通級指導学級担当等

参加人数：49 名

イ：「多層指導モデル MIM 教材の活用～2nd ステージと 3rd ステージの指導に視点を当てて～」(7 月 25 日)

講師：栃木県総合教育センター 三澤雅子先生

対象者：校長，教頭，第 1 学年担任，第 2 学年担任，特別支援学級担任，通級指導学級担当等

参加人数：79 名

ウ：「MIM の実践と『ことばのじかん』について」(10 月 8 日)

講師：鹿沼市立みなみ小学校 小野徹校長

対象者：校長・教頭等

参加人数：48 名

エ：「多層指導モデル MIM の活用について」(12 月 19 日)

講師：国立特別支援教育総合研究所 海津亜希子先生

対象者：校長，教頭，第 1 学年担任，第 2 学年担任，特別支援学級担任，通級指導教室担当等

参加人数：65 名

オ：モデル校における実践授業

第 1 学年「MIM を取り入れた授業の実践～特殊音節の指導とアセスメント」

授業者：鹿沼市立みなみ小学校 堀川知子教諭

対象者：校長・教頭等

参加人数：48 名

③ 参加者の声

ア：「低学年における読み・書き指導～多層指導モデル MIM 教材の活用に視点を当てて～」(5 月 22 日)

- ・MIM など新しい教材の学習指導を時代や子どものニーズにあわせて取り入れなくてはいけないと思った。
- ・すぐ授業に取り入れたいと思う。
- ・中学生にも生かせるか等，課題と期待が持てた。

- ・読みに対する支援方法がよくわかった。
- ・過去に MIM を実施したことがあったが、何となく実施していた部分があった。本日の研修で、その理論と意義、そして結果が出た後の指導の手だてが具体的にわかった。
- ・継続して取り組むことで成果が現れることがわかった。
- ・ただ指導するだけでなく、アセスメントシステムもあり、個々のつまずきが見とれることがわかった。
- ・読み・書きに関して小学校低学年での指導の大切さを知った。
- ・特殊音節を指導するだけが MIM だと考えていたが、テスト等による結果の累積ができることがわかった。
- ・アセスメントにより早期発見することの大切さがわかった。
- ・学校に戻って、他の先生に伝え、実践していきたい。

イ：「多層指導モデル MIM 教材の活用～2nd ステージと 3rd ステージの指導に視点を当てて～」(7月 25 日)

- ・読みの力は「2年生までの指導が重要」ということばが驚きだった。MIM の活用が学力向上に繋がることがわかった。特殊音節の定着が子どもたちの力につながると思った。
- ・一学期に MIM を実施してゆっくりではあるが、子どもたちは興味を持って参加する子が増えてきた。
- ・校内の支援体制づくりが大切であると感じた。人的な配置の部分で苦勞している。
- ・普段接している児童を客観的に分析できる理論を知ることができた。
- ・アメリカの教育との関連も示され、これから目指す点がより明瞭になった。
- ・理論的な裏付けについて理解を深めることができた。
- ・全校体制をとらなければ個人の先生の対応では時間の確保など難しいと思う。算数の TT のように支援がほしい。

ウ：「MIM の実践と『ことばのじかん』について」(10月 8 日)

- ・MIM を教育課程のどの場面で実施していくのか参考になった。
- ・読みの力をつける必要性、そしてその効果的な指導教材が MIM であることがよくわかった。
- ・MIM 実践における課題を聞くことができ参考になった。
- ・MIM を実践していくに当たり、管理職のリーダーシップの必要性がわかった。

エ：「多層指導モデル MIM の活用について」(12月 19 日)

- ・飯塚市のようにアセスメント結果を市で管理するようにすれば MIM 実践が促進されるのではないかと思った。
- ・通常学級での 1st, 2nd ステージ指導をどのように行っていくのかを知ることができた。
- ・特別な支援を必要としている子どもだけでなく、異なる学力層の子どもの読み・書きの力に MIM が効果を及ぼしている。

- ・ MIM を開発された先生のお話を聞くことができ「思い」を感じることができた。DVD(飯塚市教育委員会が作成し、譲り受けた MIM 指導場面別ビデオ)をチェックし、活用していきたい。
- ・ 平成 27 年度は国語の指導計画に位置付け、該当の学年での実施に向け準備していきたい。
- ・ 3rd ステージ指導が本校の課題であったが、具体的事例の提案があり、参考になった。
- ・ 鹿沼市全体で子どもを見取る共通の視点を持ち、授業をデザインしていく方向性を持てるということはずばらしいことだと思う。

5 MIM に関する事業についての現時点での成果

- (1) 教育委員会主導で、平成 26 年度 MIM に関する研修会を 3 回実施することで、ひらがなの読み書きの習得の遅れや、特殊音節のルール理解に関するつまずきが、その後の読み書きの困難に繋がり、つまずきの早期発見、早期支援の必要性を市内教員が理解することができた。
- (2) MIM を全小中学校 37 校に配置し、年度当初の 5 月に MIM の 1st ステージ指導の研修会を実施したため、全小学校低学年において、MIM の指導を実施することができた。
- (3) 小中学校管理職対象の研修会で、本事業における管理職のリーダーシップについての講話により、MIM の活用について学校全体での推進が図られた。

6 MIM に関する事業についての現時点での課題

- (1) MIM の活用・実践において、本年度から始まった学校と、以前から実施をしていた学校があり、実施状況において学校間差がある。
- (2) 1st ステージ指導や MIM-PM テストは実践したが、その結果を分析し、2nd ステージ指導、3rd ステージ指導をどのように行っていくのか、また、どのような場で、どのような指導体制で行っていくかは、各学校の課題となっており、平成 27 年度はまずこの部分での研修の必要性を感じている。
- (3) 実施時間の確保については、朝の学習や、国語科の年間指導計画に位置付けての実施、さらに特設時間の創設による実施と、各学校においては試行錯誤しながら取り組んでいる。実践結果を検証し、教育課程への位置付けを検討していきたい。
- (4) 本年度教育委員会主催の研修会では、国立特別支援教育総合研究所の海津亜希子先生、栃木県総合教育センターの三澤雅子先生に講師をお願いして実施した。今後は、自前でできる研修体制の構築を目指し、モデル校での指導者養成を図っていきたい。

7 MIM に関する事業を進めるにあたって期待すること

- (1) MIM による指導が各小学校で定着することで、小学校 1、2 年生の読み書きに関するつまずきの早期発見、早期支援が図れること。また、教師の専門性向上とともに、児童生徒の学習の保障による児童生徒の学力の向上が図れること。

- (2) 管理職のリーダーシップにより、事業が推進されること。
- (3) 校内での指導体制の構築により、学校全体がチームとなって、事業が推進されること。

8 MIM への要望

タブレット版 MIM が開発されているようだが、その情報や導入可能かどうかの可否について知りたい。

9 今後 MIM に関する事業を進めようとしている自治体へのアドバイス・メッセージ

- (1) 通常の学級での指導も含めた特別支援教育の必要性がいわれて久しいが、未だに発達障害の理解については、その種類や特性、支援方法について教員が十分理解しているとは言えない。そのため、発達障害に関する理解を学んだ上で、本事業を実践するとより効果が大きいと考えている。
- (2) MIM 自体を視覚化や動作化等の指導のみと考える傾向があるが、MIM 本来の意味を理解した上での活用が望ましい。
- (3) 研修会の持ち方では、単発的な開催ではなく、小学校 1, 2 年の学級担任を対象とし、ステージごとの指導方法やアセスメントの分析など、複数回継続的に実施する方が効果があると感じた。
- (4) 本事業を推進していくためには、教育委員会の積極的、計画的な推進とともに、管理職の強いリーダーシップが必要であると感じている。

(文責：鹿沼市教育委員会・指導主事 湯澤 正弘)